

年間第二十八主日

マルコ 10・17-30

2018.10.14

高円寺教会 9:30 ミサ

クラレチアン宣教会 梅崎 うめざき たかいち 隆一神父

教会の青年たちとの集まりの中に会社で重役をなさっている方も参加されました。その方は青年に向かって、「君たちは会社だったらわたしと話せる立場にはないのだから、この状況をととても大切にすべきだ」と話されたそうです。神のことばを語る時に自分の持っている肩書を捨てるということが必要なのですが、それはなかなか難しいものです。

神学生の頃、「哲学を勉強して理性をなくし、神学を勉強して信仰をなくす」と学びました。神様と神学を比べた時に、神学を捨てる決断も場合によって必要です。なぜなら神学の中には、神の救いを説明できないような神学というものもあります。

今日登場するお金持ちは、お金と神様を比べたときに、お金のほうが大切だと考えました。わたしの場合は、神様を選び取るためにお金よりも捨てるのが困難なものがあります。それは人との関わりです。ですから異動などがあって、神様のために大切な人を置いて出かけるというのは非常に難しいことです。わたしにとっては、家族はそうでしたし、子どものときから付き合っている友達もそうです。それから、司祭になって担当した教会で、仕事をせずに子どもと遊んでばかりいたのですが、その子どもたちの成長を見守りたいと思っても、異動になって離れてしまいます。異動の後、数年が過ぎて、その子どもたちに会うと、すっかり大きくなっています。こちらは感激のうちにいるのですが、その子どもたちにはそっぽを向かれてしまっていて、とても寂しい思いをします。昔はあんなにべたべたひっついてき、無理難題も言ってきたことを真摯に受け止め、あれだけお世話したのに、もう今はなんの見返りもないっていうことを感じ、非常に残念に思ったりするわけです。

でも、子どもたちが自由であること、それから、成長して離れていくっていうことは非常に喜ぶべきことです。それが子どもを愛することになる。自分の許から人が離れていくことを、留めたい、ではなくて、離れていくことをゆるすことは、ひとつの大きな愛になると思います。

考えてみればわたしも、昔育ててくれた神父さんや実の母からもうすっかり

離れて、見向きもしないのにゆるされています。だから、わたしがゆるしてもらっているように、人との関わりに執着しないってことは、神様の掟である人を愛するために、とても大切なことだと思います。自分はいつも愛されたいと思っているけれども、愛されなさい、ではなくて、愛しなさい、というふうに聖書の中には書かれています。

お母さんというのは、自分の子どもが自分から離れていくことをゆるしていくことを求められると言われます。そしてそれはお母さんにとってはとても辛いことです。しかしそれは子どもにとって大きな愛になります。

自分の持っているものを置いていくことは、いらないから捨てていくというわけではなく、むしろ、お互いがより豊かになるために必要です。自分の持っている物にとらわれることなく、神様と人を愛するために、神様に自分の大切な物をお捧げすることができるようにともに祈りましょう。